

平成26年度 長良川河口堰県民調査団の感想、 要約質問及び回答

○長良川河口堰県民調査団の視察箇所について

【感想及び要望】

● 長良川河道掘削箇所（40kp付近）

治水対策に関すること

- ・河道の樹林化が進んだ地域において、高水敷の掘削を水際の樹林帯を残しながらの工事状況が理解できた。中流域の河道掘削において、もう少し広い範囲でどのような工程で工夫がされているか資料で説明してほしい。
- ・治水対策として万全な河道掘削をお願いしたい。
- ・柳の木を残しているのはわかるが、対岸のようにきれいになっていればよいと思った。
- ・河道掘削はやってよかったと思う。
- ・今回の視察箇所以外に（揖斐川にも）危険箇所があるが、早めの対応をお願いしたい。
- ・（掘削状況を見て）自然災害だと思っていたが工事とのことで驚いた。現場で説明を受け、堤防の弱さを見た気がした。
- ・今後、十分に観察、観測を続け危険な状況になるようであれば速やかに元に戻す等の対策をすべき。

環境対策に関すること

- ・河川敷の樹木をなぜ残すのか不思議に思っていたが、生物の住環境を守るためと知り、とてもよいと思った。
- ・自然に配慮した掘削について、現地を見ながら説明を受け大変勉強になった。
- ・もっと自然環境を残した掘削をしていただきたい。
- ・河道掘削という工法を選定した経緯等の説明及び自然環境保護が考慮されていることがわかった。
- ・川の環境に配慮されていることがわかった。
- ・工事現場を実際見ることができて理解が深まった。
- ・河川敷の樹木を残すことにより生態系への影響も考えられているため、今後も同様に推進してほしい。
- ・環境に配慮している点はとてもよかった。
- ・自然環境に配慮した浚渫がされていると思った。

・いろいろ工夫しているようだが、自然を前面に押し出している割には人工的に過ぎる。

● 安八破堤箇所

防災意識の伝承に関すること

- ・自助・共助・公助の連携による地域防災力の強化「防災の基本は向こう三軒両隣」住民同士が協力し合う環境づくりが必要である。子供が川で遊ばないので、川に関心が無くなり水防にも関心が無くなっている。大水害等の記憶の語り継ぎが必要である。
- ・長良川本川の安八堤防破堤状況を経験した方の話は体験した人しか話せないことだったので、大変勉強になった。
- ・元消防団員の経験談には説得力があった。河口堰建設後、河床掘削により出水時の水位を低下させていることなど、本川のみならず、支川への効果が顕在化していることが理解できた。破堤時の経験談などは、今後、次世代へ語り継ぐ必要がある。
- ・過去の教訓を生かす大切さを感じた。
- ・30歳半ばの私でさえ体験していない。昭和51年以来大きな水害は無く、若い人たちは水害の恐ろしさを知らないので、語り継ぐことが大切だと思った。
- ・災害が発生した箇所は、現在も大なり小なり災害の可能性があると思った。災害を防ぐには過去に遡ってもう一度見直す必要があると思った。
- ・災害の貴重なお話しが聞いて良かった。北方町にも天王川があるので今後の防災活動に生かしたい。
- ・洪水を経験していない私たちのような若い世代にとって貴重なお話しでした。
- ・治水事業の重要性を理解するためにも、経験者の話を聴くことは来年度以降も続けてはと思う。治水の影響を受ける安八町等、長良川流域の住民がもっと関心を持って参加するべきだと思う。
- ・貴重な災害時の話を拝聴し、大変勉強になった。特に、「自分たちの土地は自分たちで守る」というところに感銘を受けた。
- ・私も当時、消防団の分団長をしており、決壊後の後片付けの応援に約100名の団員と行ったことを思い出した。ガマは揖斐川沿いの堤防でも複数噴出していたことを思い出した。
- ・被災から裁判までの話を聞くことができ、知識が増えた。特に、水防活動の際に、堤防等の草刈から始めなければいけなかったことを知り、日ごろの整備の重要性を痛感した。
- ・実際に水害があった方の話を聞くと、治水事業の必要性、重要性を改めて認識できた。川で遊んだ思い出や川の恐ろしさや面白さを伝えたいという思いが強く心に残った。

- ・最高裁判決の「河川管理の特殊性」「財政的・社会的・技術的制約」主な部分もある。しかし、河川防災のすべてを住民の責任にすることはできない。「治山治水は国家の要諦」であるに違いない。流域の、そして地先の歴史的、現代的情報のすべてを住民に公開し、説明責任を果たし、住民の意見に謙虚に耳を傾ける一段と前進した河川管理の理想が求められている。

● 長良川河道掘削箇所（11kp付近）

治水対策に関すること

- ・下流部の掘削作業と沈砂池や土砂の盛土など、確実に河道が掘削され、治水安全度が向上しつつあることが理解できた。他の方からの質問のように、河川整備計画の目標流量8000m³/sに対して、どの地点の断面が不足しているのかが分かる図（縦断方向）があれば、この工事の必要性が理解できると考えられる。
- ・子供の頃に見た掘削現場に比べ、環境に良い作業をしていると思う。川の沿川に住んでいるものとして水位が低いのは安心できる。
- ・少しでも被害が少なくなるように工事を進めてほしいと思った。
- ・近年の予想以上の豪雨に対応できるよう、少しでも早く浚渫していただきたい。
- ・ぜひ今後もやってほしい。
- ・川の掘削は大変なことだが、住民の安全のためにも進めてほしい。
- ・水害対策として必要だと思う。
- ・浚渫して河床を下げることは大変良いことだと思いました。揖斐川も同じように浚渫してもらいたい。
- ・浚渫現場を目にし、説明を受けたのでよくわかった。もう少し時間を取ってほしかった。
- ・河積を拡大するといいいながら、河床を掘る（深くする）ことに比重がかかっていないか。意地悪い見方をすれば、「河床を低くしたので河口堰のゲートを上げると塩水が入ります。ゆえにゲートの試験開放はできません」と言いたいための掘削のように感じられないこともない。

環境対策に関すること

- ・もっと自然環境を残した掘削をしていただきたい。
- ・砂が大量に出ているが、あの砂土を農地に利用してはどうか。根菜類の栽培に適していると思う。
- ・河床は日々変化していき目に見えないので管理が大変だと思った。
- ・川の中の砂を上げるという作業をどのように行うのか不思議でしたが、実際に目を見ると、いろいろ工夫されていることがわかり感動した。沈砂池で土を沈殿させ、きれいな水を流す工程が分かり勉強になった。

○長良川河口堰県民調査団の視察箇所について

【要約質問及び回答】

● 長良川河道掘削箇所（40kp付近）について

No. 1 視察前の大雨で崩れた場所があったが、点検はどのように行われているのか。

回答

○平常時や出水時の河川巡視、出水期前・台風期・出水後、地震の発生後等の点検、定期的な縦横断測量等により、堤防や護岸の沈下・損傷状況や河道の局所堆積・洗掘、施設の老朽化等の状況を適切に把握しています。

No. 2 自然災害発生によって計画が変更されることがあるのか。

回答

- 平成20年3月に策定した「木曾川水系河川整備計画」に定められた目標を達成するため、河道の水位を低下させるための河道掘削や樹木の伐開等の河川整備を実施しています。
- 河川整備計画は、計画策定時点の流域における社会経済状況、自然環境の状況、河道状況等を前提として策定されたものであることから、策定後にこれらの変化や新たな知見、技術の進歩、計画を上回る洪水の発生等により必要がある場合には、対象期間内であっても適宜見直しを行うこととしています。

No. 3 木は現在の半分くらい残すだけでよいのではないか。掘削範囲を広げてはどうか。

回答

- 現在実施している河道掘削は、「木曾川水系河川整備計画」で定められた河道整備流量（目標）8,000 m³/秒を計画高水位以下で安全に流下させることができない区間において実施しています。
- 河道掘削範囲を広げ必要以上に河道断面積を大きくすると、その区間だけ洪水の疎通能力が良くなり下流側が危険になることから、上下流のバランスや連続性を考慮し、安全度の低下する区間が生じないように段階的に整備を進めています。

No. 4 水防のため効果があればよいが、掘削によって堤防が弱くならないか。

回答

○河道掘削は、洪水時の河川水位を低下させるために実施していますので、洪水時に堤防に働く流水の作用を低減させることができます。また、河道掘削は、洪水による侵食・洗掘に対する安全性を確保するために必要な高水敷幅を確保するよう掘削範囲や掘削形状を定めています。この幅の確保が、流下能力確保や河川環境保全等から難しい場合については、低水護岸を整備し保護することとしています。

No. 5 当面の河川整備の目標を忠節地点で7,700m³/秒として、40kpでは、35,000m³の河道掘削が行われたということだが、35,000m³の根拠は何か。
この地点ではもっと大量の掘削が可能ではないか。この地点で7,700m³/秒を安全に流下させるために必要な断面積は何m²になるのか。その必要断面積に対し、現状断面積はどれだけ不足しているのか。

回答

- 現在、「木曾川水系河川整備計画」で定められた河道整備流量（墨俣地点8,000m³/秒、忠節地点7,700 m³/秒）が流下した場合の水位を全川にわたって計画高水位以下で安全に流下させるために必要な河道断面積を各地点で確保するための河道掘削や樹木伐開等を実施しています。
- なお、河川の水位は、その地点の断面積だけでなく河道形状や植生の被覆状況、下流側の水位や流速等の影響等、複合的な要因で決まることから、工事実施前の測量結果等から各地点で必要となる掘削範囲及び掘削形状等を定め、必要な河道掘削や樹木伐開等を実施しています。
- また、必要以上に河道断面積を大きくすると、その区間だけ洪水の疎通能力が良くなり下流側が危険になることから、上下流のバランスや連続性を考慮し、安全度の低下する区間が生じないように段階的に整備を進めています。

No. 6 見学場所のすぐそばで既に高水敷の一部がえぐられていた。掘削により予期せぬ渦が生じたのではないか。

回答

- 河川は、流れている場所毎にそれぞれ異なる地域特性を有しており、土砂の移動や植生の変化等により長期的に変化していくとともに、洪水や濁水等の流況の変化等によって、時には急激に状態が変化するという特性を有しています。このため、平常時や出水時の河川巡視、出水期前・台風期・出水後、地震の発生後等の点検、定期的な縦横断測量等により、河道の状態等を適切に把握し、必要に応じて対策等を講ずることとしています。

● 安八破堤箇所について

No. 7 破堤箇所はガマがあったということだが、国土交通省はその事実を認識していたのか。それに対してどのように対応したのか。他に類似箇所はなかったのか。

回答

- 昭和51年9月洪水時では長良川沿いの各所で、水防団、沿川住民、自衛隊による必死の水防活動が行われ、破堤箇所付近においても堤防の法崩れやガマが発見されたことから、杭打ち土のう積み工法や月の輪工法による応急措置が講じられています。

No. 8 破堤した時の水位のデータを教えてほしい。

回答

○昭和51年9月12日午前10時28分頃に破堤が生じました。近傍の墨俣水位観測所の水位は、午前10時にT. P. +10.7m、午前11時にT. P. +10.5mを観測しています。

No. 9 現在は護岸工事等で安全になったと思うが、地震による液状化等で堤防が大丈夫なのか。

回答

- 堤防は土堤を原則としているため、地震による被害を受けても復旧が比較的容易であり、洪水や高潮の来襲前に復旧すれば、普通の堤防の機能は最低限確保することができることから、従来より地震を外力として考慮せず、洪水のみを外力として考慮し、これに対する防御を優先させてきました。
- また、過去の地震による堤防被害事例の調査結果によれば、基礎地盤が液状化した場合に被害の程度が著しくなる傾向にありますが、被害が最も著しい場合でも堤防全てが沈下してしまった事例は確認されておらず、ある程度の高さ（25%程度以上）は残留することが分かっています。
- しかし、河口部や堤内地が低いゼロメートル地帯等では、被災した堤防から津波や河川水が越流し、浸水による二次災害が発生する恐れがあることから、浸水による二次災害を起こさないよう、必要な耐震対策を実施しています。

● 長良川河道掘削箇所（11kp付近）について

No. 10 土砂の使い道について今後の案は。

回答

- 河道掘削により発生した土砂については、高水敷の造成、堤防の基礎地盤改良の材料等の河川工事や、三重県木曾岬干拓地の造成などの公共事業に有効利用しています。
- 今後も、引き続き、公共事業等に有効利用するよう、関係機関と調整を図っていきます。

No. 11 11kpでは、今年度11万 m^3 、今後10年間で200万 m^3 の浚渫を予定しているということだが、河川整備の目標を達成するために必要な断面積は何 m^2 になるのか。その必要断面積に対し、現状断面積はどれだけ不足しているのか。

回答

- 現在、「木曾川水系河川整備計画」で定められた河道整備流量（墨俣地点8,000 m^3 /秒、忠節地点7,700 m^3 /秒）が流下した場合の水位を全川にわたって計画高水位以下で安全に流下させるために必要な河道断面積を各地点で確保するための河道掘削や樹木伐開等を実施しています。
- 河川の水位は、その地点の断面積だけでなく河道形状や植生の被覆状況、下流側の水位や流速等の影響等、複合的な要因で決まることから、工事实施前の測量結果等から各地点で必要となる掘削範囲及び掘削形状等を定め、必要な河道掘削や樹木伐開等を実施しています。

○長良川河口堰について

【感想及び要望】

● 長良川河口堰

治水に関すること

- ・河口堰の機能や運用がよくわかりました。しかし、河口堰上部の通路から水面までの高さが思った以上に近いこと、今騒がれている南海トラフ地震の津波の時どうなるかと思った。もし、津波により壊れた場合、浚渫により河床が下がっていることから、塩害による被害が発生することが考えられるため、今後の津波対策に期待します。
- ・初めての方は長良川河口堰のことをよく理解できたと思う。
- ・河口堰について説明を受け、堰本体の構造もわかりました。いろいろ研究や調査を基に運営しておられ、大変感心し、安心もしました。
- ・河口堰というものが理解できた。
- ・河口堰の意義を知り、重要な役割だと思った。
- ・河口堰を含む治水対策により、水位が下がり、堤防の安全度も増した。支川の伊自良川が増水した時も早く水が引くようになった。
- ・河口堰の目的が治水目的であろうと、利水目的であろうと、河口堰を含む治水対策により確実に長良川の水位は下がっている。
- ・長良川の水位低下などに大きな効果がもたらされている。環境面でも影響が見られないように思われ、有効な施設であると思う。
- ・河口堰の必要性が浚渫（治水）の前提であり、利根川大堰での苦い経験が塩害防止につながっている。低平地の治水は、水位を低下させることであり、特に10数km付近のマウンド掘削は重要である。河口堰は水資源開発特定施設であり、「塩害防止と流水正常機能維持」する効果を持ち、浚渫が水位を下げ、水害リスクを低下させる機能を有しているため、この両面を理解してもらう必要がある。
- ・今後、有効に利用してほしい。
- ・長良川河口堰管理所等の資料では、「河口堰の完成により可能となった河道浚渫によって、洪水の流下能力が向上し、河口堰運用前に比べ1～2mの治水効果があった」としている。資料の記述「河口堰の完成により可能となった河道浚渫」を「河口堰完成前に行った大規模浚渫と、河口堰完成後に行ったマウンドの除去」に、「河口堰運用前に比べ」を「河道浚渫前に比べ」に訂正すべきでないか。
- ・洪水時のゲート操作に万全を期してほしい。
- ・いろいろ説明を聞いて理解ができた。
- ・仕組みについて、よく考えられていると思ったし、河口堰は必要だと思った。

- ・河口堰建設後、独特の生態系が喪失（汽水域、連続性等）したことは事実であり、洪水時の水位低下による水害リスクの軽減も大きく貢献している。さらに、塩害を気にしない営農形態の変化や水道水源の供給水の配分方法について、弾力的運用が見込めれば、ゲート操作のきめ細やかな運用により、流水正常機能を回復することを期待したい。

環境に関すること

- ・初めて見学に来ました。ゲートが2重になっていること、放流等環境調査が行われていることを知り、子供たちも一度連れてきたいと思いました。
- ・塩害対策には必要な施設である。魚に対する対策も続けてほしい。
- ・魚の成育が心配だったが、いろいろ配慮されていて安心した。
- ・継続して調査、確認されていたが、新しい工夫があるとよいと思った。
- ・川の断面に河口堰があり、魚はどうしているのだろうと想像していたけど、とてもたくさんの鮎をふ化させたり、魚の通り道があったり、環境のことをとても配慮していると思いました。
- ・川漁師の夫を持つ友人が当時河口堰ができて、川は死んだ！と言っておりました。本日、現物を見て、環境破壊の巨大建築物に見えました。たくさんの工夫をされていることは分かりました。しかし、素人の私には、堰の為上がることをあきらめる魚が多いように思えました。また堰についての説明が建設した言い訳の羅列ばかりのように思え、堰を建設した為の弊害についても教えていただきたいかった。安定した農業用水の取水には必要な施設であると思った。
- ・近隣の住民の生活にメリットがあるが、河口堰を建設したことによるデメリットも教えてほしかった。
- ・自然環境に配慮した河口堰の管理を強くお願いしたい。
- ・「水は命」と昔から言われております。その河川を守る重要なお仕事をされている方々に感謝の気持ちを持っておりますが、人間以外の生物の為、護岸工事など、コンクリートで塗り固めるのではなく、過去の自然に近いような形で河川環境を整えていただきますようお願いいたします。
- ・川づくりで大切なことは、人命財産を水害から守ると同時に川の自然環境を守り、憩いの場、ふれあいの場として暮らしを豊かにする空間づくりである。今後も水辺の美しさを守り続けていきたいと思う。

○長良川河口堰について

【要約質問及び回答】

● 長良川河口堰について

No. 1 長良川河口堰の総工事費、今後毎年の維持管理費用は。また、財源はどこか。

回答

- 総事業費は約1,500億円です。
- 管理費は、治水・利水の機能が発揮されるよう施設の操作、点検、維持及び修繕等のために、平成26年度は約9億7千万円です。
- 管理費の財源は、国の交付金と愛知県、名古屋市及び三重県の負担金で賄われております。